

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：41304

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531098

研究課題名(和文) 乳幼児(3歳未満児)に対する臨床美術を導入した造形表現カリキュラムの構築

研究課題名(英文) Introducing Clinical Art into the creative expression curriculum of under-3-years-olds

研究代表者

保坂 遊 (Hosaka, Yu)

聖和学園短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：90423996

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：保育所における3歳未満児への造形活動の実態調査より抽出された課題を基に、臨床美術を取り入れたプログラム開発と実践研究を行い、更に保育者養成カリキュラムの具体的なモデルを示した。宮城県内保育士1430名のアンケート調査では、発達の個人差への配慮、活動テーマや具体的内容、評価方法、子どもの満足度に対しての問題意識に有意差が認められた。また感覚を多用する臨床美術を導入したプログラム開発、保育園2カ所での実践を通し、乳幼児の活動に対する意欲向上や変化、保育士の気づきと理解について効果が認められた。更保育者養成における保育表現技術演習のカリキュラム案を作成し、造形表現技術の効果的な教授内容を提案した。

研究成果の概要(英文)：On the basis of questions gained from a factual survey of creative expression activities of day nursery children under 3 years, we have developed an educational program, which incorporates Clinical Art, and performed practical research. We have also provided a concrete model for the training of childcare workers (CWs). In a questionnaire targeting 1,430 CWs in Miyagi pref., significant differences among CWs were observed in terms of attention to individual developmental differences among children, themes and specific contents of activities, evaluation methods and satisfaction levels of children. Our program was put into practice at two day nurseries; through this, we observed improvements and changes in children's willingness to take on activities and an increased awareness and understanding of CWs. Finally, we created a proposal for practical exercises on creative expression within CW training, and proposed an effective course design for the teaching of creative expression skill.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：3歳未満児 造形表現活動 臨床美術 保育者養成カリキュラム

1. 研究開始当初の背景

(1) 幼保一体化について議論されている昨今、3歳以上児に対する保育内容については、幼児教育と保育の双方から、多くの実践や議論が重ねられてきた。しかし、発達が未分化とされてきた0~2歳児についての具体的な保育内容や造形表現活動を示唆する方法論は未だ十分とはいえず、保育現場では充実した保育表現活動の構成や評価に対しての不安や行き詰まり感を持つ保育者も少なくない。これらのことより、乳幼児の造形表現活動の具体的指標を検討することは、急務であるといえる。

(2) また、幼保一体化の動向や、保育者の質の向上という視点から、造形表現活動への深い理解力を持ち、様々な保育技術を体得し、子どもの豊かな成長を適切に援助できる保育者が求められており、3歳未満児へ対する保育援助技術の具体的アプローチの教授法のモデルを作成することが、保育者養成の立ち場からも重要であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、乳幼児(3歳未満児)に対する保育活動において、造形表現活動の視点からより発達に適した保育内容の充実を図るカリキュラムを開発するための基盤研究である。はじめに、保育現場における3歳未満児に対する保育内容についての課題をアンケート調査より明確にし、脳機能の活性化について研究が進められ保育現場への導入も試行されている臨床美術のセオリーを低年齢児保育へ応用し、より充実した造形表現活動の意義や内容について検討する。さらに上記の研究より明らかになった課題をもとに保育者養成カリキュラムとして効果的な教授モデルを提案するものである。

3. 研究の方法

本研究は3カ年(平成23-25年度)で計画された。平成23年度(1年目)は、乳幼児とりわけ3歳未満児へ対する造形表現活動の保育現場の実態と課題を捉えるために、保育現場へのアンケート(対象:0~5歳児担当保育士)を実施し、0~2歳児の保育を担当している保育士の取り組みや課題、問題点などを分析する。それらを基に平成24年度(2年目)では、発達や成長を考慮したより具体的な目的と内容について、臨床美術アプローチを取り入れたカリキュラム開発を行い、パイロットプログラムの実践研究を保育現場で実施する。また、保育士との協働により、子どもの変化を観察し、保育士によるカリキュラム評価より、妥当性、有効性について検証する。平成25年度(3年目)では、0~2歳児への効果的な保育造形カリキュラムを整理し、重要な主要素を抽出し、保育内容の質の向上を目的とした新たな造形活動援助の提言を行う。更には、より有効的な保育者養成カリキュラムの具体的なモデルを示すこととした。

4. 研究成果

(1) 保育現場における保育造形活動の実態調査

基礎調査として、宮城県内の公立・私立保育所330箇所へ質問紙の郵送によるアンケート調査を実施し、回答を得られた278カ所(回収率82.4%)の0~5歳児クラスの主担当保育士1430名のデータを有効分析対象とし、保育現場で実際に保育活動を展開している保育士を対象に、活動実施形態や内容、評価法、また問題点や悩みについて調査分析し、造形表現についての保育現場の現状課題を抽出した。

「日常の保育内容で行っている具体的造形活動の内容」について各年齢クラスで取り入れている関係性について $\chi^2$ 検定を行ったところ、すべての分析に有意差が認められた。この結果からは、発達過程の中で、おおむね3歳児を境に、0, 1, 2歳児クラスで主に組み込まれている内容と3歳以上児クラスで組み込まれている内容の差異がはっきりと確認できる。3歳未満児では、なぐり描き、シール遊び、新聞紙遊び、手形押し、タンポ遊び、スタンプ遊びにおいて有意に取り組みされていることがわかる。また、年齢によって各発達に即した内容が実施されていることが分かると同時に、安易なものや、単純な活動は、年齢が上がるごとに減少し、より高度で複雑な内容へと移行していることがわかった。

「活動計画立案上の配慮」について、心掛けていることや配慮点について自由記述で求めたところ、「発達や個人差に対する配慮」、「意欲的に活動するための配慮」、「環境構成への配慮」、「イメージを引き出す導入や保育技術」、「安全管理」などの項目に分別された。これらの配慮事項と各担当クラスについて $\chi^2$ 検定を行ったところ、「発達や個人差に対する配慮」( $\chi^2(5)=39.544, p<.01$ )、「環境構成への配慮」( $\chi^2(5)=18.742, p<.01$ )、「イメージを引き出す導入や保育技術」( $\chi^2(5)=25.109, p<.01$ )に有意な差がみられた(Table.1)。「意欲的に活動するための配慮」について有意差は認められなかったが、どの年齢でも度数が高く、発達に関わらず表現活動を行う上での共通した課題と捉えることができる。立案段階では、特に個人差が大きい0,1歳児クラスでの配慮が重要に

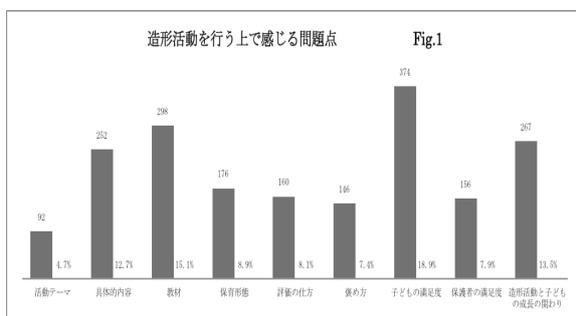
活動を計画していく上での配慮事項  $\chi^2$ 検定 Table.1

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
発達や個人差に対する配慮	229 ▲	271 ▲	213	221	179 ▽	111 ▽
	58.7%	54.9%	47.4%	45.2%	43.7%	39.5%
	4.303 **	3.052 **	-0.593 ns	-1.732 +	-2.236 *	-3.276 **
環境構成への配慮	82 ▽	132	148 ▲	154	124	85
	21.0%	26.7%	33.0%	31.5%	30.2%	30.2%
	-3.711 **	-1.165 ns	2.122 *	1.437 ns	0.681 ns	0.549 ns
イメージを引き出す導入や保育技術	42 ▽	73	71	106 ▲	82 ▲	59
	10.8%	14.8%	15.8%	21.7%	20.0%	14.4%
	-3.247 **	-1.073 ns	-0.362 ns	3.499 **	2.149 *	-1.19 ns

(▲有意に多い、▽有意に少ない、p<.05) \*p<.10 \*\*p<.05 \*\*\*p<.01

なること、またより想像力が高まる高年齢児に対して、どのようにイメージを引き出すかという点に考慮されていることがわかる。

「活動を行う上での問題点」について（複数回答可，総出現度数 1977），最も多く挙げられたものは，子どもの満足度（374）であり，続いて教材（298），造形活動と子どもの成長の関わり（267），具体的内容（252），保育形態（176），評価の仕方（160），保護者の満足度（156），褒め方（146），活動テーマ（92）などが挙げられた。多くの保育士は子どもがいきいきと楽しめるような活動を目的として保育実践しているにも関わらず，子どもの満足度に対する問題意識を抱えている。このことは，実際の子どもの内的な心情や効力感，達成感を確認できないことに不安を持っていることがわかる。特に低年齢児に対しては言葉でのコミュニケーションが難しい点が



含まれていることが推測される (Fig. 1)。

具体的な造形活動については，対象年齢が上がるにつれて様々な手法や高度な作業性など，発達過程を考慮した活動の幅の広がりが見られる結果となった。保育計画上の配慮点では，発達の個人差が大きい低年齢児に有意差がみられた。また，造形活動に対する問題意識として，活動テーマや具体的内容，評価方法，子どもの満足度に対して有意な差が認められた。

## (2) 保育現場での観察調査

仙台市内の私立保育園の協力を得て，保育活動の様子を観察し，0～2歳児の発達過程や興味・関心，課題について具体的に捉え，造形活動プログラム立案に必要な要素を検討した。また活動の様子をビデオカメラ等で記録し，乳幼児と保育者の関わりの中で必要な援助についても分析を行った。

## (3) カリキュラムの開発

本研究では，これまで臨床美術で実践されてきた多くのプログラムから，0～2歳児の造形活動へ応用出来るテーマや内容へと再構成し，初発的な表現活動として興味や関心を持って取り組め，表現の喜びや達成感を持つ事をできることや他領域と関連を持ちながら発達を促せることを目的としてプログラムの開発を行った。

臨床美術のプログラム開発では，様々な美術の専門的教材から，美術以外の使用目的のものまで，魅力的な表現を可能にするあらゆるものに視野を向けて，技術にとらわれることなく心を開放し，感覚的，能動的にプロセ

スを楽しめる活動を構成することを重要視している。本研究では，このような臨床美術のエッセンスを根幹としながらも，乳幼児の発達段階に沿ったプログラムへ応用し，教材研究を経て，0～2歳児を対象としたプログラムを立案した。各発達段階の子どもの姿から可能と思われる作業と発達の伸長を目的とした課題，また配慮事項等を検討し，日中の集団活動としてできる1時間程度の時間内で，それぞれ1回で完結できる内容とした。開発にあたり，臨床美術カリキュラムの開発を長年行ってきた株式会社芸術造形研究所（東京都千代田区神田駿河台）の協力を要請し，乳幼児が扱える安全性の高い教材についての示唆も得つつ検討した。

## (4) 保育実践による検証

上記研究で開発した臨床美術アプローチを取り入れたカリキュラムを保育園にて実施し，その効果を検討した。実施は平成24年10月より平成25年2月にかけて，仙台市内の社会福祉法人が運営する保育所2カ所の協力を得て，0歳児，1歳児，2歳児の各クラスにおいてそれぞれ，1回の保育観察の後，3回の臨床美術プログラムの実践を2施設において計18回実施した。実施には，報告者でもある臨床美術士が担当し，現場保育士は，事前に指導案を理解した上で乳幼児の援助にあたった。A保育園で実施した事後には，各プロセスでの反省や気づきや課題など各保育士が実践記録をまとめ，抽出された課題と観察ビデオをもとに改善したプログラムをB保育園で実践した。このことにより，プログラムの精度や効果の向上がみられ，よりの確に介入の妥当性について検証することができた。

各年齢の乳幼児の姿より，発達過程や発達課題を抽出し，季節に沿って様々な体験ができるようプログラムは構成した。0歳児では，色彩やものなどに対する興味関心を引き出し，初発的な表現活動の芽生えを培うことを目的に，触れる，遊ぶ，試すなどの行為を重要視したプログラムを組んだ (Fig.2)。1歳児では，様々な技法や素材に体験的に触れられるよう環境を作りながら，スクリブル，シール貼りなどの基本的な造形活動を作品として完成させていく喜びを味わえるよう展開し，季節感を考慮したテーマでの造形表現活動として構成した (Fig.3)。2歳児は，周囲への興味関心がより強まり，身体活動も活発になり知的好奇心も深まる。この時期の幼児に対して，より豊かで，ダイナミックな表現活動が行えるよう，作業のスケール感を大切にしながら，多くの技法や道具使用を取り入れたプログラムを提供した (Fig.4)。また，本研究ではこれまでの臨床美術プログラムや理念を大切にしながらも，低年齢児の発達に沿った内容へと工夫し展開した。

## (5) カリキュラムの妥当性の検討

現場保育士との協働によりカリキュラムの効果と意義について，乳幼児の発達の変化を観察記録より評価したのものについて，また保



Fig.2



Fig.3



Fig.4

育士自身の気づきと理解の変容について評価を行い、分析した。保育活動を共に援助した保育士から得られた意見から、日常の保育と比較し、様々な表現方法や教材、技法に触れ、自分が捉えていた子どもの姿以上に、様々な表現の可能性のあることを発見した等の気づきがあった。3歳未満児の発達段階での活動に対しての固定概念を払拭し、子どもの長期的な成長の可能性を見据えながら保育を計画、展開していくことの重要性を再確認した場ともなった。また、時間配分と集中力の問題や、テーマを子どもが理解できるか、教材を扱えるか等の点に置いて意見が挙がったが、きっかけとしての体験という認識と、「準備期のための導入」として3歳以上児へ継続していく保育内容として構成していくことが、0～2歳児での表現活動において今後重要となると考えられる。

(6) 造形表現カリキュラムの重要要素の抽出

3歳未満児を対象に実践した臨床美術メソッドに基づくプログラムより、乳幼児（0～2歳児）の各発達段階で重要と思われる造形活動の要素を抽出した。

### ① 色彩遊び

#### a. スクリブル

乳児も腰が据わり、ものを握れるようになって、興味関心からパステルなどをもち、画用紙などの支持体へ自発的に描き始める。低月齢児では握る力はまだ弱く、筆圧が弱いいため、描いた線が認識できるような柔らかいオイルパステルなどが適している。舐めるなどの行為もみられることから画材の安全性への配慮が必要である。支持体は、紙を手で押さえることができないため作業中に動きにくい厚手の画用紙等か、テーブルへ貼るなどの工夫も必要である。色画用紙や様々なテクスチャの紙などいろいろ素材へ描いてみることで興味や意欲を引き出せる。この時期のスクリブルでは点や線から円運動へと手先、腕の発達に伴って、徐々に力強く、なめらかに、大きなストロークで描けるようになっていく。様々な色を使用し、混色の変化などを楽しみながら、活動プロセスを何度も繰り返す行為の体験を重ねることが重要である。スクリブルは発達過程における基本的な描画活動であり、子どもの発達の初期段階において最も重要な行為のひとつである。工夫しだいで様々な形に発展させ豊かな活動にも展開できる。注意点として、作品を大人が過度に仕立てる必要はなく、子どもの素朴で純粋な表現（表出）の痕跡を最大限に尊重した装丁などを心掛けたい。

#### b. 絵の具遊び

保育において初発的な絵の具との関わりでは、十分な環境さえ用意できれば、直接的なフィンガーペインティングなども大きな刺激となるが、低年齢児ではアレルギーの不安や安全性などの問題、生活空間の中での活動として制約がある現場も多い。臨床美術では水彩絵の具のじみ絵や本研究での食紅絵の具などは、色彩の心地よい広がりや変化の美しさを感じることが出来る点など豊かな感性の土壌作りとして多いに経験させたい技法である。オイルパステルとの併用でバチック効果を楽しんだり、刷毛、ローラー、スポンジ、タンポなどの道具を使用することで、自らの限界を越える表現が可能になったり、コントロールを越えた表現を発見したり、創造的な表現を楽しむ素養を培うことができる。この時期は、こうした制作過程をいかに感覚的に楽しめるかという点を最も重要視すべきである。絵の具での制作では様々な色が混ざり合った結果、濁ってしまうことも多々ある。そうした結果を予想して失敗のないような結果ありきの活動が目的とならぬよう保育者の理解が必要となる。

### ② 立体造形遊び

#### a. 粘土遊び

子どもは砂遊びやどろんこ遊びと同じよ

うに、粘土の感触を楽しみながらその可塑性から変容する不思議な形態に想像力を働かせる。3歳頃になると油土などが個人に与えられる保育現場が多いようであるが、未満児に対してはどのような段階を経て導入すればよいか。小麦粉粘土での代用は一般的であるが、アレルギーの有無の確認など乳児ではリスクもある。本研究では、0歳児に対して、直接粘土を触るのではなく、カラータイツの中に紙粘土を入れる事で、その感触を楽しみながら形の変化を楽しめる工夫を行った。微細運動の発達とともに様々なものに触れ、いじる、つまむ、押す、たたく、伸ばすなど粘土に触れるとき手先で行う運動は数知れない。また、1、2歳児では大きな塊としての粘土に触れ、身体全体で粘土の存在と向き合う体験や道具を使う事で形を変容させることができること、多様な素材と混合して使用することで表現の広がりを感じることが出来る。低年齢での粘土活動では、なにかを作るという意識よりも、実際の物質存在に直接触れていく体験や行為に意義がある点を大切にしたい。

#### b.紙工作

立体的な制作を扱う場合、形を形成する過程で切る、貼るなどの作業が必要となる場合が多く、低年齢児の活動では制限される事が多い。しかし、ある程度の準備や保育士の援助により、共に造っていく活動を通して、立体造形の魅力を伝えていく事は重要と考える。平面的な紙を折る、くっつけることで立体的なものに変化していくというおもしろさに気づく、また紐通しなどは早い段階からも可能であり、本研究ではツリーの装飾に毛糸を通す作業を1歳児が挑戦し集中して楽しむ過程が見られた。また制作した造形物を遊びとしておもちゃとして活動を展開していくことも保育の魅力である。身体的な遊びやコミュニケーション遊びへと発展させることのできる立体制作を考えることも可能である。しかし、立体制作としての目的には、空間構成感覚や形態のおもしろさを楽しむ感覚を培うねらいもあり、創造的活動と使用用途が明確な作業とは考え方を区別すべきであろう。また既存の形（紙コップや牛乳パック等）を利用することも安易でよいが、皆が同じ形になってしまいがちである点と自由度が利かなくなる点などは課題である。

#### ③ものとの関わり遊び（行為）

ものとの関わりは、乳幼児の造形活動につながる遊びの中で自ら意欲的に行う独特な活動である。子どもは紙（例えば新聞紙）を丸めたり破ったりすることや、粘着性のあるもの（シール）を貼ったり剥がしたり、箱やビニール袋などにもものを詰め込んだり出したりという行為を楽しむ。こうした活動を促進するための環境整備はどの保育所でも行われており、身近なパックや布地等で保育士が手作りで作成した遊び道具など工夫を凝らしている。こうした大人の日常生活での行

動の縮図的な作業のひとつひとつを遊びとして楽しむ子どもの姿には、そうした遊びが後の基本的生活力の基盤になるであろうという視点と、行為が表現活動へ結びつく想像的、創造的作業としての可能性を感じさせる視点を持つこつができる。身体感覚を伴いながら破る、切る、丸める、くっつける、貼るなど、様々なもの自体との関わりの中で足したり、引いたり（加減）する行為の繰り返しの中で、ものの存在（あるいは消失）を実感しているのではないかと捉えられる。こうした活動は日常のなかで、それぞれが部分的に、断続的に、あるいは突発的に繰り返されながら、ときにはひとつの活動としてまとめあげ作品化していくことも、自分がしている行為を確認し、達成感や充実感を得て、次の意欲へつなげていく事にもなる。本研究では紙遊びに色和紙やおはながみなど乳児の手先の力に合わせ柔らかい紙を使用したと同時に、色彩感覚の刺激もねらいとして様々な色合いの紙を用意し、興味関心を高めることができた。また破った紙をダンボール板に貼ることで、壊れてしまった形を再生していく感覚の体験もねらいとした。

#### ④統合的活動（全てを関連づけ、発展させる）

以上のように3歳未満児の造形活動では、色彩遊び、立体造形遊び、ものとの関わり遊びの主な三つの活動を挙げた。これらひとつひとつの活動は保育の中で自由遊び時や短時間活動として、無理のない範囲で日常的に行われているであろうし、継続的に積み重ねられていくことが望ましい。しかし、これらひとつひとつの活動は造形表現の中で相互に関連づき、発展させることができる。日常の断片的遊びや活動を意味付ける作業として、統合的なプログラムの実施は重要であると考える。これまで挙げてきた全ての活動や遊びが表現へと結びつく。複合的な活動としてまとめていくことで子どもも保育士もこのことを意識化することができる。更には、五領域とも関連していくことは言うまでもない。まさに感性の芽生えの時期である0～2歳児への造形表現活動のアプローチは、その後の発達や人間形成とも大きく関わることであるという再認識を持って様々なアプローチを体験的試行的、継続的、発展的、立体的に構成していくことが重要であると考えられる。

#### (7)保育者養成カリキュラムとしての保育表現技術演習のモデルの提案

保育所保育指針の改訂に伴い、平成23年度より保育士養成カリキュラムも改訂された。保育現場の現状に則して求められる高い専門性を持つ保育士の養成がその目的にある。美術、造形表現系の科目にあたっては、保育表現技術と科目名が変更となり、より保育実践力を重視するよう指摘された。そこで、本研究では保育者養成におけるカリキュラムとして、造形表現技術の効果的な教授内容の提案を行った。教授内容の構成には、3歳

未満児に対する造形表現アプローチ構築の研究の成果と臨床美術士養成講座内容を取り込みながら保育表現技術演習のカリキュラムモデルとして提案した。授業モデルには半期15回、「ドローイングトレーニング」、「アートコミュニケーション」、「教材研究〈絵画系〉〈立体系〉」、「造形遊び」、「造形の環境構成について」、並びに、通年30回（前期）「美術活動への理解」、「制作研究①②③」、「鑑賞会について」、「ロールプレイ」、(後期)「素材研究」、「指導演習」、「指導研究」、「制作研究④」とした2モデルを提案した。本研究では、臨床美術士養成講座を下敷きとして実際に行っている授業をベースにその要素を検討し、具体的なモデルケースとして提示した。現在の保育士養成カリキュラムでは、大枠だけ示され、具体的内容が標準化されていない。全国保育士養成協議会によって保育実習指導のミニマムスタンダードが確立したのと同様、現場と研究者、保育以外にも幅広い見識者から意見を吸い上げた保育表現技術、保育内容指導における教授内容のミニマムスタンダードが必要なのではないかと考える。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

①保坂遊，青木一則，上村裕樹，保育現場における造形表現活動の実態調査-宮城県現任保育士アンケート調査-，臨床美術ジャーナル，査読あり，第2巻，2013、45-53

②上村裕樹，保坂遊，青木一則，保育現場における造形活動の現状と課題に関する研究～宮城県現任保育士アンケート調査より～，帯広大谷短期大学障害学習センター紀要，査読あり，第2号，2013，45-53

〔学会発表〕(計4件)

①保坂遊，青木一則，上村裕樹，保育現場における造形表現活動の現状と課題-宮城県現任保育士アンケート調査より-，日本保育学会第66回大会，2013，中村学園大学

②保坂遊，青木一則，3歳未満児に対する造形表現活動の実践-臨床美術を導入したプログラムの検討-，全国保育士養成協議会第52回研究大会，2013，かがわ国際会議場

③保坂遊，青木一則，3歳未満児保育に対する臨床美術実践プログラムの検討，臨床美術学会第5回大会，2013，大崎市岩出山文化会館

④保坂遊，青木一則，乳幼児保育における造形活動の課題(3)-保育士との協働による臨床美術実践研究-，日本保育学会第67回大会，2014，大阪総合保育大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

保坂 遊 (HOSAKA Yu)

聖和学園短期大学・准教授

研究者番号：90423996

##### (2) 研究分担者

青木 一則 (AOKI Kazunori)

東北福祉大学・子ども科学部・准教授

研究者番号：10382665